

『国土のり・デザイン』

——わたしたちはどのような国土をつくりあげ、どう使ってきたのか——

中岡義介（元佐賀大学理工学部教授）

はじめに——わたしたちの生活空間を問い直して、佐賀平野にたどり着いた

一九九五年一月に起きた兵庫県南部地震に、わたしは心身ともに打ちのめされた被災したこともさることながら、現代科学技術を百パーセント信じて、生活空間の計画と設計、管理などにたずさわってきたのだが、それがまったく役に立たないことがあらわになったからである

同時に、それを契機に、わたしたちの暮らしの場の根本的な見直しが痛感され、そのことがさまざまな場面で叫ばれ、それに向かって動きはじめた。

さまざまな分野で、おそらくあらゆる分野でそのことが検証され分析された。投じられたエネルギーたるや、すさまじいものであった

それから四半世紀が過ぎた。しかし、どうも、状況は震災以前とさして変わっていないようにおもわれる技術の進歩は、もちろん欠かせない。が、生活空間に関するそれまでの技術の限界があつた震災で問われたにもかかわらず、技術第一主義はあいかわらずである。それどころかますます強くなっているといつて過言ではない

確かに、その結果、都市空間は洗練され、住居は快適になったかもしれない。しかし、**それが何にもとづいたものなのか、あるいは何をめざしているものなのか**ということになると、ちょっと心もとないそれでは震災が問いかけたことにたいする答えになっていないのではないか

そこで得られた知見はそれぞれ非常に有用なものである。ところが、その有用な知見が以後の社会にいまひとつ生かされていないのではないか

生かしきれないのは、ひとつには、それらを結集することがほとんど見られなかったことにあるのではないか

そして昨今、震災のみならず、従来の経験の中では予測しなかつたような災害が頻繁に起こっているいま一度、あの震災が問いかけたことに立ち戻ってみる必要があるのではないかいまの状況を、少なくともいまの方向性を変えねばならない

そのためには、災害の変異と多発をわたしたち自身の問題としてとらえ、わたしたち自身が生活に則してわたしたち自身の生活空間を問い直してみる必要があるのではないだろうか

そこに、わたしたちがこれから必要とするものが見えてくるのではないだろうか

では、どうやって問い直しをするのか

かなり根本的なところまでさかのぼって問い直しをする必要があるのではないかいわたしたちは技術一辺倒の社会にすっかり飼いならされているからである

地震という自然がもたらした激甚災害が問いかけた問い直しであるから、そのような問い直しはいつそう重要である

そうであれば、わたしたちの国土はどのようなものか、国土の形成までさかのぼってみることが必要なのではないかとそれをわたしたちが共有できれば、そこから全体をつらぬくものが見えてくるのではないかと

国土の形成までさかのぼってわたしたちの生活空間を問い直した結果、佐賀平野にたどり着いた

その国土を再生するリインカーネーションの手本・見本が佐賀にある。わたしたちの国土に新たな血と肉を与えて国土を再生しようとするとき、佐賀平野がその手本・見本であるということである

第1章 わたしたちはどのような国土をつくってきたか

1 もともと山に生きてきた

海から来て山に上る／水が湧き出るところ／山と鉱物資源／避難所としての山

2 山海に暮らすようになった

水辺と深くかかわる／東名遺跡の縄文の山海空間／舟をあやつる鳥浜貝塚の縄文人／縄文空間をいまに伝える大都市東京

3 お米が国土を改造した

交易品としてのお米／蹴裂かれる国土／古代地名に残る改造の記憶／誰が「地」をつくったか

4 グランドデザインがはじまった

官道による「地」の一体化／「地」にいかに住まったか／国土のグランドデザイン／グランドデザインと地域

5 地域はどうなったか

標準化する日常／安全という発想／「地」のスマールデザインが見えない／虫瞰で見る国土のリ・デザインを

第2章 生活空間に何が起きているか

1 山に還ろうとする

国土を席卷する都市／都市が人を吸いよせる／「草木と青空とを忘れかねる情」／郊外庭付き一戸建て住宅が求められた／平地とはちがった文化を得た／「情」なき住宅地がふえた

2 低平地を延伸する

海にかかわり続ける／海を忘れかねる情／海辺は交流の場／海は陸の庭／海辺に都市があった／低平地を忘させる海辺

3 そして自然が都市を襲う

阪神・淡路大震災は訴える／土地条件と被災状況／洪水常襲地域の生活空間／ゲリラ豪雨の水難／都市型土砂災害の出現／谷を埋め立てて開発すれば

4 生活空間にとって自然現象とは

生活空間のバロメーター／自然現象を生活空間に仕込む／記念碑で自然を日常化する／空間のリダンダンシーを

第3章 生活空間をいかに獲得したか

1 生きている大地

『海の都の物語』が教えること／「地」の成り立ちを共有する／列島百万年史の中の現在

2 先史が語る生活空間

初発の国土づくり／生活の始まり／雷とは何か／自然と協働する

3 佐賀平野に『古事記』物語を見る

かつて平野は海だった／低いことに意味がある／泥水が毎日入り込む／地下の環境にいまがある

4 クリークが佐賀平野を拓いた

泥水を暴れ川が運ぶ／呪術で川を治める／神石が土地をつくる／クリークができた／水と土の世界が生まれた

5 歴史の生きている保管庫—「みず道」の世界

小さな地域の集合体／地域ごとに「みず道」がある／「共同自助」の世界／降れば大水、照れば早魃／
国土の風景づくりの生き字引

第4章 わたしたちは国土にいかに住むか

1 「小さな環境」共同体へ

知恵と工夫の「環境」／大システムに暮らすとは／「ウチなる小さな環境」を仕組む

2 美しく価値ある居住地

水と緑のゆらぎの居住地／小さな地域を積み重ねる／庭づくりの美学で／飛び地的に住まう／
あまった時間を生産外に使う

3 支えあう空間 ——居住地より小さなレベルの「小さな環境」

凸凹に住まう／生活美の宅地／佐賀平野はひとつ、そして一戸一戸／一味同心の世界

4 自然と共生する住まい ——建物レベルの「小さな環境」

軟弱地盤の民家／軟弱地盤の民家／地中の自然を理解する／大きな二階／百年生きる家・再考／建物が風をつくる

5 集まって住む形—祖先縁・神仏縁・自然縁

中空の神社／辻の広場／続き間と三夜待

6 ナチュラル・ライフラインとコンパクト開発

風土としての水網都市／もやいのまちなか農地／公園都市に住み働く／低平地のかけ橋文化

7 新しい生活スタイル

生活空間の豊かさ／小さく住み大きく行動／自然の中の界限／市の復権／随意随時のネットワーク